



特集

聖鳥 オオワシ

流水オホーツクに舞う

オオワシはアイヌ民族が「カパツチリカムイ」(ワシ神)^{あが}と崇める聖なる鳥だ。

江戸時代には、美しい尾羽^{おぼね}が蝦夷地^{えぞち}を代表する交易品として珍重された。

今、アジア極東部のみに成鳥で約3,600羽～4,700羽しか生息していない絶滅危惧Ⅱ種^(※)で、そのうち約2,000羽が、北海道で越冬する。

海外のバードウォッチャーの憧れの鳥、オオワシに会いに知床^{しれとこ}へ向かった。

一生に一度は見たい鳥

厚い雪雲に押し込まれた札幌駅から特急「オホーツク」に乗り込んだ。旭川駅を過ぎ、石北本線で北海道の屋根と呼ばれる大雪山系を越え、車窓にぱつと青空が広がった。山が雪雲を遮ることで晴天に恵まれるオホーツクに入ったのだ。車内に差し込むまぶしい陽光が、縮んだ心を解き放ってくれる。と、そこにういういしい若者の声で車内アナウンスが流れた。「僕たちは北見工業大学鉄道研究会です。楽しい鉄道旅のために僕たちが選んだオホーツクの特別なスイーツ、おつまみ、飲み物をお席まで販売にうかがいます」。うれしい！立ち売り箱に、ホタテ醤油漬や地場産小麦・牛乳で作ったお菓子を満載してきた学生さんから、留辺薬特産・白花豆^{しろはな}のプリンを購入。ミルク感あふれる濃厚プリンの上にのった大粒の白花豆はそれ自体が和菓子のような上品な味で、和洋のスイーツを一度に味わえた。至福である。この車内販売は石北本線の沿線地域の皆様による取り組みで、この日の担当は北見市。ほかに網走市、遠軽町、大空町、北海道オホーツク総合振興局が交代で、それぞれの特産品を

(写真上) 流水の海を舞うオオワシ。オオワシは国指定の天然記念物で、シマフクロウ、タンチョウ、エトピリカ、オジロワシとともに国の保護増殖事業対象種である。写真提供=ピッキオ知床

(※) 環境省レッドリスト2020

文=北室 かず子
写真=田淵立幸



朝焼けをバックに知床半島の羅臼町にて。魚類、クジラやアザラシの遺骸などの漂着物、春に流氷の上で生まれるアザラシの子もオオワシの貴重な餌となる。羅臼町では観光船によるオオワシのウォッチングツアーも行われている。写真提供＝山本純一

二月までの週末を中心に販売するそうだ。

網走駅から駅レンタカーで斜里町ウトロを目指す。二月には流水が接岸する海岸線が左側に続く。取材に先立って（公財）知床財団知床羅臼ビジターセンターの坂部皆子さんからは、こう聞いていた。「オジロワシがアジアからヨーロッパにかけてのユーラシア大陸に広く分布しているのに比べて、オオワシはロシア極東地域から北日本沿岸地域のみです。黒と白の美しい羽毛と鮮やかな黄色い嘴のとてもきれいな鳥です。特にヨーロッパのバードウォッチャーの方々にとっては、一生に一度は見たい憧れの鳥かと思っています。魚食性の強いワシですので、海の見える海岸線の木に止まっていることが多く、流水がくれば、流水の上でも観察できますよ」。

一生に一度の憧れの鳥。つぶさにウォッチングすべく、自然ガイドの会社「ピッキオ知床」のオオワシ・オジロワシ&野生動物ウォッチングツアーに申し込んだ。ガイドが運転する車で海岸線を走りながらオオワシを探すもので、気軽に参加でき



オジロワシはユーラシア大陸北部に広く分布し、北海道は繁殖地として極東の南限にあたる重要な地域だ。写真提供＝ピッキオ知床

るのがうれしい。ガイドの竹下明伸さんから、オオワシとオジロワシの見分け方をクイズ形式で学ぶ。薄茶色で尾が白いのがオジロワシ、より大きな黒褐色の体に翼の前部と

写真提供＝ピッキオ知床



ツアーでオオワシ、オジロワシを見つけたら証明書をもらえ、記念になる。

望遠鏡越しにスマホで撮影すると、精悍な姿の画像を持ち帰ることができる。



竹下さんは、ガイドしたお客様自らが野生動物のためにできることを考えてくれるのがうれしいと言う。ピッキオは1992年、長野県・星野温泉ホテル内の「野鳥研究室」を前身として設立。フィールドとする「軽井沢野鳥の森」は、「日本野鳥の会」設立者の中西悟堂が称えた森を、現在の星野リゾートの基礎を築いた星野嘉助が保全に取り組んだ歴史がある。2019年にピッキオ知床を開設。ツアーでは一人一台、高倍率の双眼鏡が貸し出される。

将軍や大名も憧れた

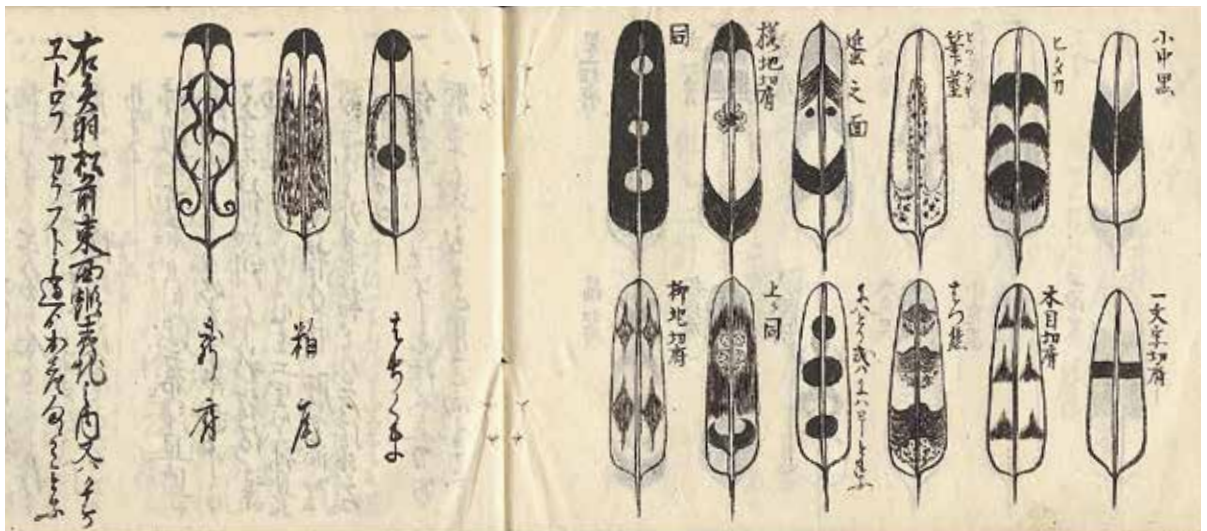
この凛々しい姿は、昔から人を

海鳴りが響くなか、野生の命が、野生のまま存在する場にいる感動がひたひたと押し寄せる。

尾羽の白、黄色い嘴という鮮やかなコントラストをなすのがオオワシだ。オオワシは翼を広げると二・五メートルになり、体重は九キロになるものも。「お、いましたね」と竹下さん。見上げると、大きなせんを描いて悠々と空を舞っている。ほとんど翼を動かしていないのは、上昇気流を利用してからのどか。わずかな水面を残して凍結した遠音別川がオホーツク海に注ぐ河口では、崖の上の梢に黒い点が見えた。望遠鏡をのぞくと、眼光鋭く周囲を睥睨する猛禽の姿が。黒、白、黄色の鮮やかなコントラスト、時おり首を動かす仕草や、ふわりとした羽毛の手触りまで感じられる。「ホッチャレを探しているんです」。ホッチャレとは産卵後のサケの遺骸だ。オオワシの眼光が、自分の目に突き刺さる思いがした。ゴー、ゴーという海鳴りが響くなか、野生の命が、野生のまま存在する場にいる感動がひたひたと押し寄せる。

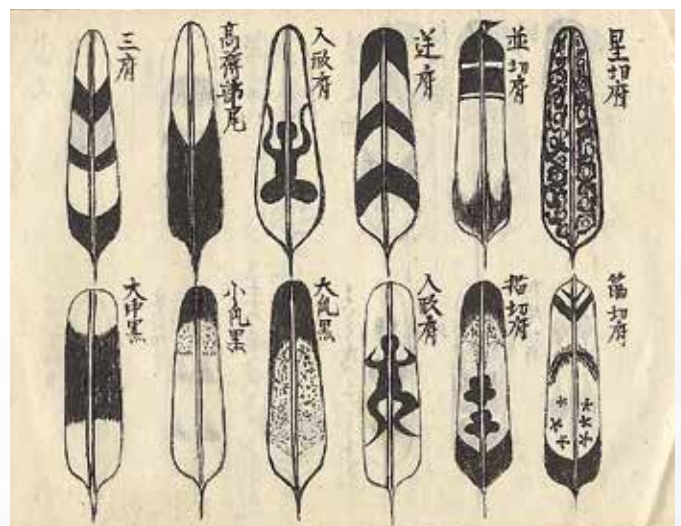


魅了した。その歴史を伝えるのが、別海町郷土資料館・加賀家文書館が所蔵する絵図だ。同館学芸員の石渡一人さんはこう語る。「江戸時代、松前藩は尾羽を將軍への献上や大名間の贈答に用いていました。藩は場所請負人に場所を経営させ、蝦夷地の水産物を中心とした交易で大きな利益を得ていましたが、ワシ羽（矢羽）・クマ皮・クマ胆・ラッコ皮だけは『軽物』と呼んで、場所請負人の取引を許しませんでした。直接、藩が扱っていたのです。『切府・中黒』は、斑文の種類ですがこの図がどの鳥かは解明していませんが、『右矢羽、松前・東西蝦夷地之内、又はクナシリ・エトロフ・カラフト辺より出産多く有といふ』ところから、オオワシやオジロワシのことだと考えられます」。江戸時代の武家社会においてワシの羽根は矢羽として第一級品だった。武士のステータスである鷹狩りに使う幼鳥も、蝦夷地から出されていた。石渡さんによると「加賀家文書」のほとんどを書き残したのが加賀伝蔵で、幕末に蝦夷地を探索した松浦武四郎とも信頼関係で結ばれ



ていたという。いったいどんな人物なのか、とにかくに気になってきた。生まれは現在の秋田県。十五歳で蝦夷地へ渡り、釧路場所の場所請負人の下で飯炊きとして働き始めた。「帳場手伝い、番屋守と修業を積み、アイヌ語通辞（通訳）、ついには支配人という場所を差配

するスペシャリストになりました。根室場所へ移ってからは会津藩から大通辞の称号を与えられたほどです。松浦武四郎とは一八五八年（安政五）に野付半島先端の野付通行屋で出会って意気投合しました。武四郎はシレットコ調査の道案内をしてくれるアイヌを紹介してくれるよう伝蔵に依頼しています。アイヌ民族に対する場所請負人の横暴に憤っていた武四郎は、野帳に場所



オオワシの若鳥の尾羽はやや白く、先端や外縁に褐色斑がある。年齢が進むにつれて褐色斑は減り、4年目にはほぼ純白になる。P.10の若鳥の写真では尾羽はまだ黒っぽく、斑（まだら）も多い。加賀家蔵「鷲羽（わしはね）の図」。別海町郷土資料館附属施設加賀家文書館蔵



斜里町立知床博物館・元館長の中川さん。オホーツク海の流水、火山、湿原、タンチョウ、エゾシカが見られる釧網本線の車窓風景を絶賛してくれた。

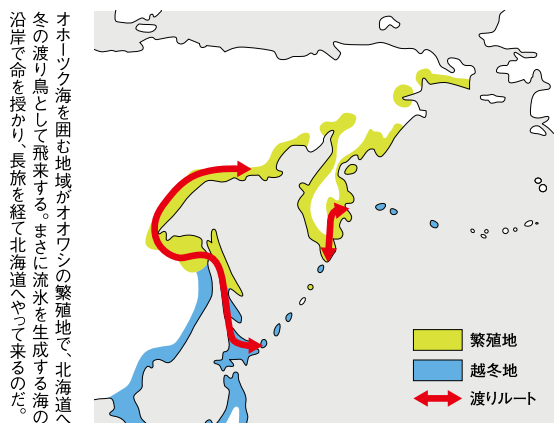
三役（支配人・通辞・帳役）のアイヌに対する評価を記しているのですが、その中で伝説を数少ない『上』の部に位置付けていました。武四郎が江戸に帰ってから交流が続き、信頼関係があったことは、間違いないです」と、石渡さんは言う。

長年、オオワシの研究と保護を最前線で担ってきたのが（公財）知床自然大学院大学設立財団業務執行理事の中川元さんだ。中川さんは日ロ研究交流に尽力し、シンポジウムを開催したこともある。「オオワシの繁殖地は、ロシア極東ペーリング海沿岸、カムチャツカ州、マガダン州海岸部、アムール川下流域です。そして北海道、北方四島で越冬します。北海道では一九八〇年代からオオワシの調査が毎年継続され、日ソ共同調査も始まり、渡りのルート解明がされました。オホーツク海の西側とサハリンの

オオワシが宗谷岬から北海道に入ってきて、オホーツク海沿岸を下します。日本海側や本州にまでいくものもありますが、メインは知床、風連湖周辺、根室・釧路管内の湖沼や川です。幼鳥を含めても世界で五千羽程度しか生息していないうちの約二千羽が飛来する北海道は、最大の越冬地です。世界で二万羽を超えるまでに数が回復しているオジロワシに対し、オオワシは減少が続いています。その理由として、繁殖地のサハリンにおける石油・天然ガス開発、パイプライン建設と森林伐採の影響が指摘されています」。

自然の餌で本来の姿に

中川さんによるとオオワシの分布は人の活動と密接な関係がある。九〇年代はじめは北海道のオオワシの九割が知床半島に集中していた。斜里側は流水が着岸するため漁に出られないが、流水がまばらな羅臼側では鋼鉄船に変わって以降、冬場もスケトウダラ刺し網の出漁が可能になった。刺し網を巻き上



資料提供＝中川元

いので使う人が皆無ではなく、鉛中毒の被害は続いているのが実情です。そして近年は、列車に衝突した線路脇のエゾシカの死体にワシが集まって、衝突事故に遭うオオワシ、オジロワシが増えています。列車にたまたまぶつかるのではないのです。ワシが線路に集まってきたというのです」と、中川さんは憂慮する。

こうした状況に対してJR北海道では、環境省釧路自然環境事務所、猛禽類医学研究所と協力しながら、さまざまな取り組みを試行している。北海道の鉄路は、豊かな自然環境の真つただ中を走行することが多い。JR北海道は、エゾシカとの衝突事故を防ぐために、早朝・夜間帯を走行する一部の列車で減速運転を行っている。今後も、専門家のアドバイスを受けながら、地域の一員として自然環境の保護に取り組んでいく。

オオワシは体が大きいため、二本の電線に体が触れることで通電して起こる感電死も、深刻な問題だった。現在、北海道電力ネットワーク（株）によって知床半島の電線には、感電する部分に止まらないよう突



知床半島で電柱に設置された止まり木。この上に止まれば、電線に体が触れないので感電を防げる。



電柱に止まらないよう、突起をつけたものもある。

起を付けたり、安全な止まり木を設置する対策が進んでいる。

近年、全国的にサケが減っている。その理由として海の温暖化があげられることが多いが、人工ふ化放流に伴う影響を指摘する声もある。人の手で採卵・授精が行われ、危険の多い稚魚期も人工飼育で守られたサケは、環境への適応力が低いというのだ。人工ふ化放流は水産業において必須だが、生物多様性の保全の観点から、野生のサケを増やすことが漁業資源の保護にも

つながる。中川さんいわく「オオワシは十一月、十二月には川でサケを食べています。サケが遡上できる川が増え、世界自然遺産のエリアは砂防ダムも改良されて効果が出ています。自然の餌は少しずつ増えていると言いますが、一月に

なるとホツチャレを食べ尽くしてしまいます。もともと多く自然遡上すれば冬の食料として利用できるようになります。カムチャツカ半島ではベニザケが大量にのぼるから、オオワシは繁殖も越冬もできるのです。人為的な餌に頼

らないのが、本来の姿です」。

時代を越えて人を魅了してきたオオワシ。「人はできる限りのことをしなければならぬ」という中川さんの言葉を深く胸に刻み、知床の空を見上げると、オオワシが高く、静かに舞っていた。

①



アキサケの捕獲に成功したオオワシの若鳥。羽根の斑文が成長とともに変化することがわかる。越冬地の道北・遠別(えんべつ)川にて撮影。写真提供=泊和幸